

恩師とその弟子達

濱上 則雄 先生

どんな問題に対しても、
オーソドックスな正攻法で
ぶつかることを勧められた



▲濱上ゼミ会。昭和54年9月

先生は、学生の間では、「少数説の濱上先生」といわれており、司法試験受験組の中には、先生の講義を聴くのを敬遠する向きもあったようであるが、民法を本腰を入れて勉強しようとする者にとっては、まことに心強い味方であった。

当時の民法といえば、我妻民法学が支配的学説であったが、われわれは、そのポリュームのある何冊もの教科書を読むだけで、フーフーいっていたし、正直いつて理解できない箇所も多かった。

ともすれば、教科書を読破する計画が挫折しそうになるときに、先生が、講義の合間に、「小さな教科書を何冊も読むよりは、きちんとした教科書を読んでください。分厚い教科書は学生のうちでないと絶対に読めません。」といわれたのには、元気づけられた。

さらに、「もし、きちんとした教科書を読んでいて、わからないことがあったら、一部は、みなさんの理解力が足りないことが原因ですが、大半は、書いた著者自身がよくわからずに書いていることが原因であることが多いので



昭和2年1月21日兵庫県生まれ。昭和28年大阪大学法経学部卒、同年助手（法学部）、35年講師、37年助教授、44年教授、52年法学部長、平成2年名誉教授、主要論文「法律行為における三面関係と無因論」（阪大法学44・45号）、「損害賠償における『保証理論』と『部分的因果関係の理論』」（民商法雑誌66巻4号、5号）、「製造物責任における証明問題」（判例タイムズ309号～335号）など。著書『現代共同不法行為の研究』（信山社）

す。あの偉大な我妻栄先生でさえ、『教科書を書いていて、三分の一は、自分の研究テーマで自信をもって書いている。もう三分の一は、他人の研究をフォローして、なんとか理解して書いている。残りの三分の一は、全く自信がなくて書いている。』と自白されています。みなさんが教科書を読んでいて、わからないところがあつたら、ほかの教科書を何冊か読んでみると、著者の方が間違っていることがわかる場合もありますよ。ですから、教科書を読んでわからなかったら、そこに印をつけておいて、次に進んでいき、あとで調べてみるとよいのです。」といってくださったときは、本当に気が楽になった。

また、年一回は、ゼミの学生を自宅に招いて、コンパをし、世間話の合間に、勉強のおもしろさについて語られるのが常であった。先生は、「みなさんは、我妻先生の教科書を読まれて、その体系的な記述に感心されていることと思いますが、なぜそうなるのかという観点からもう少し掘り下げた勉強をすると法律学がもっとおもしろくな

の退暦を祝つ会



▲退暦を祝う会。昭和62年6月14日



▲演上ゼミ会。昭和54年9月



▲退官記念講義。平成2年1月25日

りますよ。」といって、ドイツ語が読める人は、大学院の学生が中心となつて進められた読書会に出席するよう勧めてくださった。

「なぜ、外国語の本を読まなくてはいけないのですか」という私達ゼミ学生の疑問にも、先生は、次のような説明をしてくださった。「日本の教科書は、確かに、結論をうまくまとめて書いてくれています。なぜそうなるのかについての記述が本当にお粗末です。その点、ドイツやフランスの教科書は、なぜそうなるのかという点がよくわしく解説されています。外国語を読むのは大変ですが、それを読むと、法律制度の本当の理由がわかるので、勉強がおもしろくなります。結局のところ、外国の書物を読むのが、法学を理解する早道になるのです。」と、大塚法のオーソドックスな法律学を勉強するように勧めてくださるのであった。

われわれ日本人にとって外国語の壁は厚く、外国語まで勉強しようとする学生は少なかつたが、私自身が、本学部の教官となり、法学の「文献講読」の講義を担当するようになってみると、二〇年も前に聞いた先生の言葉をほとんどそのままの形で学生に語りかけていることに気づき、先生の講義の影響力の強さをいまさらながら感じている今日この頃である。

大阪大学法学部教授

文・写真 加賀山 茂

(昭和47年卒)